

アイヌ文化を次世代につなげ 命名150年を迎える北海道



「北海道150年記念式典」では、天皇后両陛下の前で美しいアイヌ民族の古式舞踊が披露された
〈提供：北海道150年事業実行委員会〉

り、「北加伊道」「日高見道」「海北海道」「海島道」「東北海道」「千島道」の6案を提出。最終的には「北加伊道」の音を残し「北海道」となったのだが、なぜあえて「海」を「加伊」として提出したのだろうか。「天塩日誌」には、武四郎が天塩川流域の探査に赴いた際、アイヌ民族の長老アエトモから、「『カイ』とは『この地で生まれたもの』という意味があることを教わった」とある。「加伊」には、アイヌ民族を愛した武四郎の思いが込められていたのかもしれない。しかし、そんな武四郎の思いとは裏腹に、「場所請負制度」など和人によるアイヌ民族への締め付けは目を覆うものだった。政府の姿勢に反抗した武四郎は開拓判官を半年ほどで辞め、長年の功績で得た従五位の位も返上した。

かつて蝦夷地と呼ばれていた北の大地が「北海道」と名付けられて150年。今年2018年は、北海道にとって特別な節目である。今回は、「北海道150年事業」を取り上げ、次世代に向けたアイヌ文化の復興と理解促進の取り組みを紹介する。

異なる文化への理解と共感 松浦武四郎とアイヌ文化

1869（明治2）年8月15日、太政官布告によって、蝦夷地という名称は「北海道」と改められた。その名付け親として有名なのが松浦武四郎だ。現在の三重県松阪市小野江町に生まれた武四郎が、初めて蝦夷地に渡ったのは1845（弘化2）年。ロシアの蝦夷地侵攻の可能性を危惧し、探検家として探査を行いその実情を伝えることを目的としていた。その成果が認められ、6度に及ぶ探査のうち4度目からは江戸幕府より「蝦夷地御用御雇入」の命を受け、探査任務に当たったという。

当時はまだ原生林が多い北海道の探査は困難を極めた。これを手助けしてくれたのが、大自然と共に暮らしていたアイヌ民族だ。彼らの協力を得た武四郎は、共に野宿をし、食事を分け合い暮らす中で、その文化・風習だけではなく彼らの考え方や心に触れる。自分たち「和人」とは違った素晴らしさがあることに強く惹かれ、アイヌ民族の暮らしや文化を紹介する数多くの紀行本を編纂した。

その後、明治政府の役人となった武四郎は、蝦夷地の名称改定に携わ

り、



武四郎は不世出の探検家であっただけでなく、作家・出版者・学者と多芸多才であった
〈提供：松浦武四郎記念館〉



蝦夷地探査で出会ったアイヌ民族の文化風習を、イラスト付きで記した日誌も残る
〈提供：松浦武四郎記念館〉

これから先の50年に向けた「北海道150年事業」とは

北海道命名150年を節目として、現在、次の50年に向けた動きが活発化している。「北海道150年事業実行委員会」が進めている事業がその代表だ。「北海道151年目の新たな一歩を踏み出す」「先人から受け継いだ財産を次の世代につなぐ」「“Hokkaido”の多様な魅力を世界に広げる」という3つのテーマを掲げ、互いを認め合う共生の社会を目指し、官民一体となった取り組みを行っている。

事業は委員会が主体となって進める「記念セレモニー」と、北海道民や関係団体・民間企業などが主体となる「北海道みらい事業」の2つを中心に構成される。「記念セレモニー」では、北海道の歴史を踏まえたプログラムを含む式典を開催。2018年8月5日に札幌市で行われた「北海道150年記念式典」では、アイヌの古式舞踊や楽器の演奏、松前神楽や江差追分といった道内各地域の伝統芸能が披露されたほか、松浦武四郎の出身地である三重県松阪市と中継をつなぎメッセージも送られた。

一方、個人や民間企業などが主体となり取り組んでいるのが「北海道みらい事業」だ。事業登録をすると、北海道150年事業の公式ウェブサイトなどで紹介されるほか、ロゴマークの使用などの支援を受けられる。例えば松浦武四郎に関するイベントや、アイヌ文化をテーマにしたワークショップなど、大小様々な取り組みが行われている。

共生社会を目指し アイヌ文化をPR

前述の「北海道150年事業」と並行し、アイヌ文化の復興や理解促進を目指す取り組みも進められている。2020年4月24日にオープン予定の「民

族共生象徴空間」(白老町)は、まさにその象徴ともいえる存在であり、国が主体となり整備が進められている。象徴空間内には東北以北初の国立博物館となる「国立アイヌ民族博物館」と、「国立民族共生公園」が建設される予定だ。しかし政府目標の「年間100万人の来場」を達成するには、より多くの人々にアイヌ文化に興味を持ってもらう必要がある。

そのため道では2018年8月から、「象徴空間開設PRキャラバン」を開始。古式舞踊や伝統食、VR映像を使ったPRも行う。また12月11日には、北海道と白老町が、象徴空間開設500日前のカウントダウンイベントを道内3市町で同時開催する予定となっている。

北海道への観光客誘致やアイヌ文化の理解促進を目的とした取り組みとしては、若年層へのリーチを想定した事業もある。公益社団法人北海道観光振興機構(以下機構)が推し進める、北海道を舞台とした人気TVアニメ「ゴールデンカムイ」とのコラボスタンプラリーだ。機構の田中洋一次長によると「北海道への旅行実施者を年齢別で見ると、中高年層が安定して多い。より多くの若い方々にも足を運んでもらい、さらに北海道の魅力や文化を深く知ってもらうための施策として、TVアニメ『ゴールデンカムイ』とコラボレーションし、北海道各地の施設やスポットをめぐるスタンプラリーを考えた」とのことだ。道内計12カ所のチェックインスポットでQRコードを読み込むと、スマートフォンのカメラ画面上にTVアニメ「ゴールデンカムイ」のキャラクターが現れ、一緒に写真を撮ることもできる仕組みになっている。

グローバル化が進んで久しい現在。国籍も文化も異なる人々がより身近になった今、同じ大地に暮らすアイヌ民族の文化や風習を理解し、共感できる感性が求められている。



「北海道150年記念式典」は事業実行委員会長の道知事・高橋はるみ氏の式辞で開幕した
(提供:北海道150年事業実行委員会)



「民族共生象徴空間」はアイヌ文化の多彩な魅力を体験できるフィールドミュージアム



札幌市で8月23日から開催されたPRキャラバンは市民を含め多くの来場客でにぎわった
(提供:民族共生象徴空間開設準備支援プロジェクトチーム)



人気コンテンツとのコラボで若年層への興味喚起を狙う(写真はスタンプラリーポスター)
(提供:公益社団法人北海道観光振興機構)

協力・写真提供:
公益社団法人北海道観光振興機構
民族共生象徴空間開設準備支援プロジェクトチーム
北海道150年事業実行委員会
松浦武四郎記念館